

神饌田で稲刈り

9月4日、東2号北1、三田与志男さん(89)の北海道神宮神饌田で抜穂祭が行われました。今年の出来秋は、夏場の高温少雨続きで作柄が伸びませんでした、それでも平年並みの出来秋を迎えました。

北海道神宮(札幌)、原口法義司の清めに続いて、地元12人の早乙女が田に入りました。介助役の6人の若者に付き添われ、黄金色に色づいた「ほしのゆめ」の稲穂を一本ずついねいに手刈りして介助役に手渡し、介助役はそれを束ねていき

ました。昭和54年以来、欠かさず献上してきた三田さんの神饌米は毎年10俵(1俵60kg)。新嘗(にいなめ)祭で神前に奉納します。



初の水稲生産者総決起集会開く

9月11日、東川町農協は本所大ホールで初の「東川米水稲生産者総決起集会」を開きました。会場には町内の米生産農家の8割にあたる約200人が集まり、関心の高さを示しました。

と危機感を表し、「東川米」の独自ブランド確立の必要性と、これまで以上に独自販売に力を入れていく姿勢を訴えました。農協への本年産新米買入れ予約は、町内への全配分量を4万俵以上上回る24万俵(1俵60kg)に達しているということです。年々「東川米」に対する評価が高まっているようです。



板谷重徳組合長は「全国的な米余りの中で、今年は生産オーバー分が国内70万トンに近づいている。生産オーパー分が米市場に混乱を来たす要因になっている」

そのため、会場では一層の高品質米出荷にむけて、全量1等米を目標に、粒ぞろいの米を届けるために整粒歩合80%以上、おいしさを届けるためにタンパク含有率7・4%以下、輝きのある米を届けるために水分調整15%基準を守ること、などを生産者に呼びかけました。

「豊作だった去年に比べて、収量は平年並みに落ちたが、最高品質でスタートできてホッとした」と顔がほころびました。今年の町内水稲米出荷配分量は20万6千俵(1俵60kg)。農協扱量は約18万3千俵と見込まれています。農協では「東川米」ブランド確立に向けて、全量精粒歩合80%の高



全量1等米出荷を果たした山崎さん(写真右)の米検査

静岡県の産地視察第一青果がの瀬副社長が来町

8月31日、東川産野菜の出荷先本州大手、静岡県清水町の瀬副第一青果、長瀬徳光副社長が当町を視察に訪れました。写真。長瀬氏が産地視察として来町したのは初めて。町内3カ所のほ場を回

つて、旬のトウモロコシ、長ネギなど、今年の順調な生産状況を視察しました。松岡市町長との話し合いでは、東川町農協から販売開始したばかりのペットボ



トル入り「旭岳源水」(500リットル)に触れ「水は今、注目されているので、当社の商品の一つとして取り扱ってもらうようう、納入先のスーパーマーケットに話をしているところ」と旭岳源水のペット

ボトル新商品に興味を示していました。静岡県地方への農産物出荷は、主に同社が主取引先。農協の年間総出荷額の4分の1余りを占めています。「大手スーパーで東川フェア(8月23〜26日)を開いて大盛況でした」と県内での大好評ぶりを話していました。

東川町出身者の東川出身会(東京、札幌、旭川)のふるさと訪問が初めて実現しました。

9月12日、一行は、数十年前ぶりの再会で旧交を温めました。昨年11月に「ひがしかわ東京会(三好光吉会長)が発足。また札幌東川会が今年30周年を迎えたのを機に、ふるさと訪問が実現したということです。

東京から20人、札幌から16人、旭川市内の出身会からも8人が来町して、3カ所の会員が一堂にそろう、議会議員ら町関係者を合わせ84人が集いました。

松岡市町長は「おいしい水、うまい空気、豊かな大地が自慢。最高を



地元の手作り料理を満喫した昼食会

目指してまちづくりを目指したい」と歓迎。さっそく昼食会を開き、初顔合わせしました。「おぼろづき」の新米おにぎり、かぼちゃの煮物、シカ肉の大和煮など、地元の手作り料理の数々に舌鼓。町理事者、議会議員らも加わって、昔話に花が咲きました。一行は、大雪旭岳源水の湧(ゆう)水池を訪れ「うまい!」「おいしい!」と感嘆の声。紅葉が始まった旭岳岬の池周辺を散策したり文化ギ

ャラリー、さらに旭山動物園を回って1泊2日の旅を満喫しました。

今年の米田舎スタート

9月12日、今年の町内米出荷がスタートしました。米検査場の東川町農協玄米センター(西4号北32)に

トップを切って出荷したのは、東倉沼区の山崎雅文さん(58)。110袋(1袋30kg)の「ほしのゆめ」は、水分量15・8%、精米タンパク含有量6・4%と見事な成績で全量1等米出荷を果たしました。「豊作だった去年に比べて、収量は平年並みに落ちたが、最高品質でスタートできてホッとした」と顔がほころびました。

品質米出荷を目指しています。出荷始めに当たって、板谷重徳組合長は「7、8月夏の不順な天候で品質的に厳しいことが予想されるが、産地を確立するという大きな目的に向けて頑張りたい」とあいさつ。松岡市町長も「消費者の皆さんに素晴らしい、と評価を受けてもらえるようしっかりとやってもらいたい」と激励しました。

韓国の高校生とグループを組んで写真作品を共同制作し、交流会なども参加しました。

高校写真部の生徒たちが交流する全国総文祭島根大会(7月28日から5日間、鳥取県松江市・三朝町)と日韓青少年写真交流(8月10日から5日間)に参加した道立東川高校の写真部生徒が9月10日、帰町報告のため役場を訪れました。

参加したのは大野靖奈さん(18)、齊藤華陽公(かよこ)さん(17)、石黒真菜美さん(17)、斎藤麻衣さん(17)の4人。このうち大野さん、齊藤さん、石黒さん、写真右から順に、が来庁しました。



韓国の高校生とグループを組んで写真作品を共同制作し、交流会などにも参加しました。「韓国の友達とは今もネットですらやり取りをしている」と言い、たくさんの友人を作った様子を話していました。

全国総文祭(社)全国高等学校文化連盟写真専門部主催では、全国35人の高校生が撮影会や作品展示、講評会など写真を通じて交流を深め

松岡市町長は「韓国の皆さんと交流できるということは、町にとっても誇りです。この経験を今後に生かしてほしい」と激励しました。同校の写真部生徒が韓国訪問したのは2年ぶり3回目。